

中国音楽史

—宋代以降を中心とする儒学における雅楽思想の分析—

田 中 有 紀

東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程

緒 言

中国音楽はこれまで専ら音楽史や科学史の分野で研究されてきた。本研究は、儒学や経学の一部として楽がどのように論じられてきたかを、宋代以降の雅楽（国家祭祀や朝会で用いる音楽）に関する言説を中心に分析し、新しい中国音楽史を描く手がかりとする。

楽は古くは六芸の一つであり、また楽に関する著作は伝統的な図書分類において経部に分類される。経学の一分野ではあるが、他経と異なり楽経というものが明確に存在しない。だからこそ歴代の儒者たちは柔軟に思想を展開し、その結果、多彩な議論を生むに至った。また、礼楽と称されるように楽は礼を補完する役目を担うが、そればかりでなく、詩学や天文暦算など様々な学術分野と関連する。つまり楽を通して、伝統中国の様々な思想的営みを見ることができ、また現存する史料の豊富さからも、これまでの中国思想研究を十分補い得るものである。宋代以降の雅楽については、南宋の蔡元定や明の朱載堉など一部を除き、従来の研究では否定的評価が下されてきた。その理由は、宋代以降多くの楽論が政治思想と密接に関わるようになり、また宋学と結び付き思弁性を増し楽律理論が複雑化するあまり、実際の演奏に応用できず、現在の音楽学や科学史の枠組ではうまく評価できないからである。そこで本研究では、楽の問題を中国思想として捉えなおし、士大夫や儒者が自らの理想とする雅楽をどのように構想し、いかなる経学的根拠を与えて儒学の中に位置付けたかという問題に注目した。

本報告は私がこの三年間で行った研究の成果であり、大きく三つの方面に分かれる。第一に宋明時代の雅楽に関する言説を儒学思想の文脈から見直すことで、従来の停滞音楽史観から解き放たれた新しい音楽史を構築すると同時に、これまでの宋学や明代朱子学研究を補完するため、「北宋士大夫による楽器論の展開」と「朱載堉の黄鐘論」として研究を行った。第二に、宋明同様否定的評価の強い清代楽論を分析し、その宋明音楽観を検討す

るほか、新しい儒学思潮における楽の位置づけの変遷を理解するため、「凌廷堪の燕楽研究」とし研究を進めた。第三に、近代中国の音楽史家たちの多くは伝統音楽に関して深い造詣があるにもかかわらず、中国近代音楽史はこれまで専ら西洋音楽受容の観点から研究されてきた。本研究では伝統中国の雅楽思想に関する分析を生かし、中国近代音楽史の新たな側面を描くため、「国楽をめぐる議論」と題し王光祈の分析を行った。

考 察

1. 北宋士大夫による楽器論の展開

宋代では楽律改定が繰り返されたが、その大部分は北宋仁宗期に行われている。仁宗期では楽律に関して活発な議論が行われ、それに関連して鐘や磬の編成についても盛んに論じられた。しかし神宗期になると楽律論は沈静化し、様々な楽器の形態や配置について議論されるようになる。特に、『周礼』に見える八音という概念に基づき、鐘や磬など特定の楽器ばかりを重視せず、雅楽楽器をすべてひとしなみに重んじるべきという主張が展開された。このような八音思想に基づき、王安石学派である陳暘（1068－1128）は『楽書』¹⁾の中で、どのような楽器配置が経書と一致するかを考察し、祭祀の主宰者の身分の差だけではなく、祭祀のランクに応じて細かく差等化された楽器配置法を構想した。北宋士大夫は、雅楽に関する議論を楽律論から楽器論という新しい分野に拡大し、礼学と並行して論じ、経学的な位置づけを与え、国家制度に組み込もうとしたのである。

2. 朱載堉（1536－1610）の黄鐘論

朱載堉は平均律の発明で知られ、明後期の実学思潮を代表する人物として高く評価されてきた²⁾。彼の楽律思想の基礎である累黍の法（基準音である黄鐘の律管を作成する際、黍を並べて得られる長さを基本とする方法）や、平均律算出の際に九進法と十進法による演算を併記したことについて、従来の研究では「朱載堉は科学的根

抛のない累黍の法を軽視した」、「二種の演算の併記は無意味であり平均律理論と矛盾する」と決めつけていた³⁾。私は朱載堉の『楽律全書』を分析し⁴⁾、以下のように結論づけた。第一に、「同律度量衡」(『尚書』)の思想を重視し、「律」と「度」は表裏一体であると主張する朱載堉にとって、累黍の法は重要であり、黍を重ねるという具体的な「度」によって黄鐘律管を作成することで、「律」と「度」の同時性を強調できる。第二に、古の文献には「黄鐘九寸」や「黄鐘十寸」等諸説あるが、累黍はこのような不統一な記述を説明するのに有効である。朱載堉は「黄鐘九寸」が黍の縦幅を基本単位とし九進法で表した長さ、「黄鐘十寸」が黍の横幅を基本単位とし十進法で表した長さとし、両者とも同じ長さであるとした⁵⁾。今日的な視点で見て「非科学的」「非合理的」とうつる思想が、実際は朱載堉の学術を構成する重要な要素となっている。朱載堉の優れた点は、「律」と「度」の連関や、「九寸」と「十寸」の解釈といった、これまで儒者たちが議論してきた問題について一つの解決策を提示すると同時に、自らの学術の中に組み込むことで、平均律という新しい理論を提示しながらも、儒学思想としての説得力を保とうとした点である。

3. 凌廷堪 (1757 - 1809) の燕楽研究

清代中葉の凌廷堪は「以礼代理」の思想で知られると同時に、雅楽研究の有効性に疑問を持ち、燕楽研究を始めた先駆者である。本研究は彼の礼研究の具体的成果として燕楽研究を捉え、その著作を分析し⁶⁾、以下のように結論した。第一に、凌廷堪は唐宋燕楽の起源を龜茲由来の琵琶と断定することで、彼が研究対象として選んだ唐宋燕楽は、古の聖人制作の楽とは断絶する。そのため、彼が経世致用の礼学研究として燕楽を選んだ理由は曖昧なままである。第二に、張寿安は、凌廷堪の「以礼代理」の主張によって崇礼傾向が高まり清代儒学史に転換をもたらしたとするが⁷⁾、燕楽研究などの典章制度研究自体が、礼学の一分野としてすでに認められ、礼の重要性が十分認識されていたからこそ、凌廷堪は唐宋燕楽と古代音楽の関係を説明せずにいられたのではないか。第三に、凌廷堪は「以礼代理」を唱えるも、理を完全には否定しない。理を宋学的心性論とは切り離すが、宇宙的・普遍的規律としての理は、凌廷堪の学術思想にとって依然として重要な存在である。凌廷堪はこういった理の概念を用い、西学と中国伝統学術、そして龜茲由来の燕楽と古の聖人制作の雅楽を、名は異なるが同じ理を持ち通じるものと考えた。第四に、凌廷堪の燕楽研究は、陳澧など

がすでに批判をしており、その後雅楽研究の重要性も見直されている。しかし、少なくとも凌廷堪が、蔡元定や朱載堉のような雅楽の楽律研究の価値を完全に否定し燕楽へと焦点を移したことは、清代楽論を考える上で重要である⁸⁾。

4. 国楽をめぐる議論

近代中国では西洋音楽の流入に触発され、国楽の問題(西洋音楽に対し、いかなる音楽をこれからの中国の正統音楽とするか)が盛んに論じられた。本研究は民国期の思想家、王光祈(1892 - 1936)の中国音楽史研究を取り上げて考察し⁹⁾、さらに現代中国の儒学復興運動との関係を考察した。王光祈は現在、「中華民族精神」を追求した「愛国主義思想家・音楽研究家」として高く評価されている。王光祈の中国音楽史は西方との交流で始まり、その後も交渉を続け、外来文化を取り込みながら発展してきた歴史と位置付けることができる。彼にとって中国の伝統音楽それ自体が西との交流によって生まれたものである以上、国楽も当然、西洋音楽との交流を必要とする。こういった、外来文化に親和的な音楽観は、現代中国の儒学復興あるいは国学ブームの中で語られる音楽論にも共通し、ここに王光祈が再注目される理由があると考えられる。

まとめと展望

中国音楽史や科学史の分野で哲学の重要性は度々指摘され、中国哲学の分野でも音楽の重要性は指摘されるが、哲学と音楽学双方の専門知識を踏まえ本格的に論じた研究はほとんどない。本研究は哲学・経学・礼学・音楽・科学など従来の学術領域を横断するが、このような学術のあり方こそ儒学の本質であり、本研究が中国哲学の新たな側面を描く契機ともなるだろう。今後は、明の朱載堉を改めて中心に据え研究に取り組む予定である。現在までの研究を通し、朱載堉を除いて雅楽思想を論じることとはできず、彼を通して雅楽思想の様々な側面を理解できると確信するからである。朱載堉は北宋楽論を批判したが、これほど綿密に北宋楽論を考証した人物は他にない。また凌廷堪にとって朱載堉は中心的な批判対象であり、燕楽研究に取り組んだ主要な原因である。近代以降は平均律理論が欧州で高く評価され、王光祈にとっては中国音楽の優位を示す誇りであった。そして朱載堉研究は数多く存在するが、その多くが「平均律の発明者」としての朱載堉を描くことに終始し、朱載堉の他の学術を考察する際も平均律の発明者にふさわしい先進的な思想がど

こに見いだせるかという観点から分析され、こういった観点にそぐわない思想については矛盾と見なされる。また、これまで平均律に関わる箇所ばかりが部分的に解説されたため、朱載堉と宋学の関係という基礎的な問題も曖昧なままであった。今後研究を進める中で、朱載堉を「平均律の発明者」というイメージから一度解き放ち、楽律学・楽器論・楽舞論・暦学・数学・経学に渡る幅広い学術を貫く思想を分析し、儒学における楽のあり方を提示したい。また明代雅楽の歴史と楽論の変遷を明らかにし、朱載堉が著作の中で引用する文献を分析することで、朱載堉の思想と、朱熹や明代朱子学の間にある距離をはかり、清代考証学へと転換する直前にどういった思想的要素を見ることができるかを考察し、明代思想史研究を補完したいと考える。

謝 辞

平成十九年度より三年間にわたり、財団法人三島海雲記念財団より奨学金を頂きました。本研究を遂行するにあたり経済的、精神的な面で大きな支えとなりました。また財団の方にはたびたび励まして頂き、大変感謝して

おります。このご恩を忘れず、今後とも確かな研究を行い、日本の学術レベル向上に寄与し、社会に貢献できるよう精進してゆきたいと思っております。

文 献

- 1) 陳暘：『楽書』(元至正七年福州路儒学刻明刻本)，北京国家図書館所蔵。
- 2) 戴念祖：『天潢真人朱載堉』，大象出版社，2008。
- 3) 馮文慈：「律学新説及其作者」，朱載堉著・馮文慈点注『律学新説』，pp1-21，人民音楽出版社，1986。
- 4) 朱載堉：『楽律全書』(北京図書館古籍珍本叢刊4)，書目文献出版社，1990。
- 5) 田中有紀：「明代朱載堉之黄鐘論“同律度量衡”一累黍之法与九進位制，十進位制的并存」，『全球視野中的中国科学史国際学術研討会論文集』，pp.292-300，上海交通大学，2009。
- 6) 凌廷堪著・彭林点校：『礼經釈例』(台湾中央研究院古籍整理叢刊6)，中央研究院中国文哲研究所，2003。凌廷堪：『燕楽考原』(叢書集成初編)，中華書局，1985。
- 7) 張寿安：『以礼代理——凌廷堪与清中葉儒学思想之転変』，河北教育出版社，2001。
- 8) 田中有紀：「凌廷堪之経学与燕楽研究—“理”带来的“礼”の共存」，『東西哲学伝統中的「共生哲学」建構之嘗試国際学術研討会論文集』，pp.86-97，台湾大学，2009。
- 9) 王光祈：『中国音楽史』，広西師範大学出版社，2005。